

県外視察報告

報告者 島原 俊英

- 1 期 日：令和6年1月18日（木）13:00～15:00
- 2 場 所：箕面こどもの森学園
- 3 用 務：教育委員の県外視察
- 4 参加委員：島原委員、柳委員

（復命事項）

対応者：佐野校長

<訪問内容>

○ 学校概要説明

<学園の沿革・性質>

- ・ 2004年に「わくわく子ども学校」（民家利用）として開設。現在、創立20周年。
- ・ 学校法人ではなく、NPO法人であるためフリースクールとなる。
ただし、「いつ来てもいいよ。」というスタンスではなく、カリキュラムのあるオルタナティブ・スクールである。

<在籍する子どもたちについて>

- ・ 小学校1年生の段階から入学を希望する場合も多い。
- ・ 入学者については、まず体験学習を行った後、面接をとおして選考する。
（入学者の選考基準：保護者の関心や理解、保護者が子どもの発達の問題を受けてとめているか）
- ・ 1学年は8名としている。
- ・ 途中入学もあり、欠員待ちになる場合もある。
- ・ 子どもたちの居住地は、吹田市や豊中市などの近隣地だけではなく、遠隔地の場合もあり、近くのマンション等に引っ越して通学していることもあった。
- ・ 中学部の説明会において、公立高校への進学は難しいということを保護者に説明している。※在籍学校での内申点（調査書）において、評価（点数化）がされないため。
- ・ **（課題）** 学園が作成した子どもたちの評価は、在籍校である公立学校に送付している。学園への通学を出席として認める学校も増えてきているが、子どもが居住する市町村の教育委員会などから保護者に対して、義務違反の通知が来ることもある。

<カリキュラム・学習内容について>

- ・ 午前中に「ことば・かず」（国語・算数）を個別で学習し、午後は、自分で計画を立てて実践する「プロジェクト」を組み込んでいる。
- ・ 教科書ではなく、市販の問題集等を活用している。
- ・ 全校集会は、大ホールでサークル形式になり、全員で身近な課題について話し合う。多数決はとらずにとことん話し合い、毎時間の最後に次回の話合いの役割決めを行っている。
- ・ 全ての学習活動において、計画と振り返りを重視している。（1日、1週間単位で実施）

- ・ 子どもたち自身が、様々な行事等の計画を立てて運営している。
(修学旅行は、4・5・6年生が自分たちで企画して、フリーマーケット等で得た収入を必要な旅行費用にあてた。)

○ 校内見学

- ・ 学習活動の様子
- ・ 掲示物の実際（子どもたちが作成した様々なルール等）
- ・ クッキングルームや工作室等の特別教室

○ 学校との質疑応答

<子どもたちの進路について>

Q：中学部を卒業してからの進路状況はどうなっているか。

A：私立高校や通信制の高校に通うことが多い。海外に進学する場合もある。

<職員について>

Q：職員（スタッフ）は、どのように募集しているか。

A：スタッフは縁故採用がほとんどである。現在は、教員免許がない方もいるが、今後は学校法人化を目指して教員免許のある方を採用する予定である。学校法人化に向けて、パートナーとなる学校と協議中である。（廃校を探している）

Q：スタッフの研修はどのように行っているのか。

A：月に1回、会議や動画等で研修を行っている。

<学園の考え方>

Q：企業側の視点からすると、最近は、個人主義で自己肯定感が低い方が多くなっている気がする。どこに問題があると考えているか。

A：学園の設立は、無気力な大学生が増えているのではないかとこのところからスタートした。納得感をもって自分の人生を送るために、対話や表現活動等をとおして、多様性を実感させるとともに、他の人とは違ってありのままの自分を受け止められるようになることが大事だと考えている。

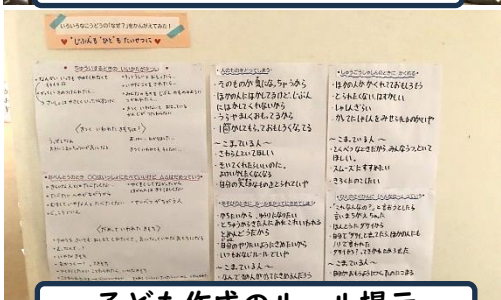
○ 視察の様子



学習ルーム



工作室（建物の3階）



子ども作成のルール掲示



プロジェクトの計画の掲示

<所感>

子どもたち主体の学びを作るために、すべての取り組みが一貫して実施されているように感じた。近年一部で取り上げられているが、「社会的課題を自分事として捉えることができず、物事に主体的に取り組むことができない人や、自己肯定感が低く被害者意識や他責の姿勢・態度を持っている人が増えてきているのではないかのではないか?」、「そうだとすれば教育のあり方も考える必要があるのではないか?」という問題意識をもって、この視察に参加した。

自己肯定感の低さや当事者意識の薄さは、対話が十分に行われていないために、自己決定感がなく、自分の人生を主体的に生きることができていないのかもしれない。菘面こどもの森学園が、そのような社会課題にしっかり向き合っているように感じた。

まず、スタッフ(先生)が対話をし、協力してビジョンや方針を創り、納得・共有しているから、異年齢や自由進度など、一人ひとりの理解度や成長に合わせる忍耐強さも持ち得ているのではないだろうかと感じた。

少人数だからこそできているということもあるかもしれないが、その考え方やあり方については、参考にしなくてはいけないと思う。

県外視察報告

報告者 柳 和枝

- 1 期 日：令和6年1月19日（金）8:30～11:00
- 2 場 所：岐阜市立則武小学校
- 3 用 務：教育委員の県外視察
- 4 参加委員：島原委員、柳委員

対応者：遠山校長

<訪問内容>

○ 学校概要説明

<学校の実情>

- ・ 本校は創立150周年を迎え、「自律・共生・創造」を学校目標にしている。（学校目標があるので、学級目標は設定していない）
- ・ 岐阜県は「5年先、10年先の教育を作りだそう！」というコンセプトで取り組んでいる。
- ・ 本校では不登校の児童生徒の増加に苦慮している。
- ・ 市内の中学校5校に不登校対応の教室ができたが、小学校段階からの対応が必要ではないかと考えている。則武小学校に独自の不登校対応の教室を設置しているが、職員の不足など課題も多い。

<自由進度学習と異年齢集団学習>

- ・ 昨年度までは、自由進度学習を全面的に押し出していたが、今年度は内容を見直し、一部の教科等で、自分の計画を立てるところで取り入れている。
- ・ 令和3年度から始めた「なか」(ジャン)スクールは異年齢集団学習のことである。異年齢集団での遊びは、岐阜市内の多くの小学校で取り組まれている。
- ・ 令和5年度の「なか」スクールの学習活動は、次の4つである。
①協働的な活動 ②サークル対話 ③体育的な活動(遊び) ④学び合い(国語・算数)
※②については、イエナ・プランの「哲学対話」という言葉は使っていない。異年齢での対話は、本来は地域の子ども会等が担っていたことを学校で行っている。今後は、地域に戻していくことも模索しながら、今は学校で行うしかないと考えている。
- ・ (課題)教科の学習活動のねらいをどこにもっていくのかという点が課題である。カリキュラムの位置付けが難しい。
※カリキュラム上に位置付けると、評価が必要となるため、評価ができるのかということが疑問である。
- ・ 「なか」スクールは、その特性から、特別な支援を要する児童や外国籍の児童にとっては、有効な学習活動である。

なかJスクールの成果

- ①「自律」…いつもとは異なる人間関係の中で、自分の願い・自分の計画をもとに活動を進められる。
- ②「共生」…活動を創造する場面において、教えたり教えられたりするなかで、自分の役割を自ら見出せる。
- ③「創造」…仲間と共に活動する「喜び」を実感し、居心地のよさを体感できる。

・ 自らの学びをプロデュースする力を育てること、学習計画やリフレクション（振り返り）が大切であること、リフレクションの際に、教師の見届けや声かけをすることが重要である。

→「子どもに任せる」という視点で、一見無駄だと思えることをいかに有益にするかが大切。

○ 校内見学

- ・ 授業（なかJスクール）の様子 ※下学年（1・2・3年）と上学年（4・5・6年）のグループ
- ・ 校内不登校対応の教室

○ 学校との質疑応答

<求められている資質・能力について>

Q：高度経済成長期の日本は、外国に追いつけ追い越せと、目標をもってがんばっていたが、現在は社会の閉塞感がある。そのようななか、社会では「自分たちで課題を見出し、目標を設定する」という、これまでやってこなかったことを求められてしまう。企業に入ってくる若者は、求められていることに対応できないことがあるため、自分の会社では、サークル対話を取り入れている。日本のよさを生かしたイエナ・プランの実践が必要と思うが、その点はどのように考えているか。

A：企業からの視点は、学校教育においてもとても参考になる。サークル対話をとおして、他者との考えをすり合わせ、みんなで共感した目標を設定していくことがとても大切だと考えている。

<自由進度学習の課題について>

Q：イエナ・プランを実践していく上で、どのような点が課題であるか。

A：学習活動をカリキュラムにどのように組み込むのかということや、意味のある評価になっているかということを考えなければならないことが課題である。カリキュラムをつくる際に、子どもたちが身に付ける力を洗い出し、何が必要であるかどうかについて、職員全員で協議し共通理解していく必要がある。（子どもにとって必要な活動かどうか。）

<他校種等との交流について>

Q：宮崎では、幼保小が連携して共に研修を行い、子どもたちが幼児期に育てたい力について共有し、幼児期に育ってきた力を小学校でも更に伸ばしていけるよう取り組んでいる。他校種等との連携した取組はあるか。

A：幼稚園と連携して、「遊びを自分で計画する」といった取組を行っている。無駄を受け

入れる覚悟をもつことで、非認知能力の育成にもつながることがある。幼保小連携は、小1ギャップの解消にもつながり、また「自らの学びをプロデュースする」という自由進度学習の視点にもつながると思う。

また、市内の全ての学校は、コミュニティ・スクールが導入されており、企業の方も関わってくれている。今後は、キャリア教育において、「産学官」とのつながりだけでなく、「金融」ともつながり、「何のために生きるのか」ということについて考えていく必要がある。

○ 視察の様子



学校からの概要説明



なかJスクール（計画）



なかJスクール（下学年遊び：高学年補助）



なかJスクール（上学年遊び）

<所感>

遠山校長先生は、「学校を、全ての子どもにとって居心地のよい空間にしたい。」と何度も口にされたが、そのための理念に基づいた様々な取組が随所に見られた。

特に、「なかJ（仲良しジャングル）スクール」の取組は、とても興味深いものであった。異年齢集団遊びのグループを基盤に、遊びだけでなく様々な学習にも取り組み、これからの時代に求められる力をつけていくことをねらいとしたものであり、学校の教育目標「自立・共生・創造」を具現する活動であった。午前中に、4つの学習活動を各1時間、それを年に11回もしていることは驚きであった。この時間には、不登校の児童も参加し、普段教室から飛び出してしまう児童も、一緒に過ごすことができている、ということであった。

活動では、先生方はほとんど前面に出ず、子どもたちが自分たちで話し合い、計画を立て、実行していた。また、活動の後の振り返りを大事にしていた。

評価の難しさといった課題もあるが、子どもたちが、異年齢の中でも安心して意見を述べ合ったり、教え合ったりしながら、学びに向かっている姿を目にし、異年齢集団という要素は、子どもたちの成長にとって、大きな役割を果たしていると痛感した。